

# 漢点字 講習用 テキスト

## 初級編 第二回 (全十回)

横浜漢点字羽化の会  
二〇〇三年八月十五日

### 目次

#### 1 複合文字 (1)

1. 漢数字および第一基本文字を部首とした文字 (1)	2
※ 「木」を部首として含む文字	2
〈林 森 材 相 想 果 課 休 保〉	
※ 「未」を部首として含む主な文字	5
〈来 味〉	
※ 「本」を部首として含む主な文字	5
〈体〉	
※ 「宀」(ウ冠)を部首として含む文字	6
〈字 宗 宝 安 案 穴 究〉	
♪愛唱歌 「森の水車」	9
読みの練習 (6)	10
書き取り問題 (6)	12
2. 漢数字および第一基本文字を部首とした文字 (2)	14
※ 「宀」(ウ冠)を部首として含む文字 (つづき)	14
〈完 院〉	
※ 冫冠を部首として含む文字	14
〈軍〉	
※ 「十」を部首として含む文字	15
〈計 早 協 直 朝 世 業 古 苦 枯 湖 有 存 在〉	
♪♪愛唱歌 「学生街の喫茶店」	20
読みの練習 (7)	21
書き取り問題 (7)	23

3. 漢数字および第一基本文字を部首とした文字 (3)	25
※ 門構えのある文字	25
〈聞 間 問 開 閉〉	
※ <sup>く</sup> 口構えの文字四つ	26
〈回 国 固 個〉	
※ 「元」の儿(ひとあし)の付いた文字	28
〈兄 見 介 先〉	
※ 「兄」が部首として含まれる文字一つ	29
〈祝〉	
※ 「兄」の上に八が付く「兌」が部首として含まれる文字二つ	30
〈説 税〉	
※ 「見」を部首として含む文字二つ	31
〈覚 視〉	
※ 「介」を部首とした文字一つ	32
〈界〉	
♪♪♪愛唱歌 「もずが枯れ木で」	32
読みの練習 (8)	33
書き取り問題 (8)	35
4. 漢数字および第一基本文字を部首とした文字 (4)	38
※ 「学、覚」の冠「ツメ冠」を含む文字二つ	38
〈榮 勞〉	
※ 「加」とそれを含む文字	39
〈加 賀〉	
※ 「化」とそれを含む文字	39
〈化 花 貨〉	
※ 「言」、「云」を部首として含む文字	41
〈信 恋 芸 会 絵 伝 転〉	
※ 「火」を部首として含む文字	44
〈秋 畑 炎 談〉	
※ 部首の「列火」を含む文字	45
〈点 然 燃〉	
♪♪♪♪愛唱歌 「一週間」	47
読みの練習 (9)	48
書き取り問題 (9)	51
⊕ ティータイム 『365日の雑学本』より「中秋の名月」	53
【附】 これまでに出てきた漢点字一覧	54

---

♪ 今回から「読みの練習」の前に、「愛唱歌」を入れました。口に親しんでいる歌を、漢点字で味わっていただきたいと存じます。♪

---

### 3 複合文字 (1)

ここで言う〈複合文字〉とは、 $\text{ㇿㇿ}$ つ以上の〈部 $\text{ㇿㇿ}$ 〉(漢字のパーツ)を、ブロック状に組み合わせた構成の漢字です。〈部 $\text{ㇿㇿ}$ 〉は、 $\text{ㇿㇿ}$ 々 $\text{ㇿㇿ}$ つの文字です。前回ご紹介した〈基 $\text{ㇿㇿ}$ 文字〉がそれです。〈部 $\text{ㇿㇿ}$ 〉は〈複合文字〉の中で、「偏」、「旁」、「冠」、「脚」、「繞」などと呼ばれて、その文字の音や $\text{ㇿㇿ}$ 味を表します。

〈複合文字〉は、漢字の $\text{ㇿㇿ}$ 類法の「 $\text{ㇿㇿ}$ 書」では、〈会 $\text{ㇿㇿ}$ 文字〉と〈形声文字〉に当たります。とりわけ〈形声文字〉は、漢字の $\text{ㇿㇿ}$ 割を占めていますので、〈基 $\text{ㇿㇿ}$ 文字〉の理解が、〈漢字〉の理解に繋がること $\text{ㇿㇿ}$ かります。

〈漢点字〉の多くは、 $\text{ㇿㇿ}$ マス「 $\text{ㇿㇿ}$ 」の形で表されます。 $\text{ㇿㇿ}$ マスに $\text{ㇿㇿ}$ つの部 $\text{ㇿㇿ}$ を割り当てて、全ての部 $\text{ㇿㇿ}$ を、左右の関係で表します。そのために、 $\text{ㇿㇿ}$ 来は上下の関係で表さなければならない文字も、左右に配置して表します。

また、 $\text{ㇿㇿ}$ つのマスだけで表すために、 $\text{ㇿㇿ}$ つ以上の部 $\text{ㇿㇿ}$ を含む文字は、その中の $\text{ㇿㇿ}$ つの部 $\text{ㇿㇿ}$ を選択して表すことになります。

さらに、点字の符号には限りがありますので、異なった $\text{ㇿㇿ}$ つ、 $\text{ㇿㇿ}$ つの文字が、同じ点字符号に重なることがあります。そのような場合、左右の部 $\text{ㇿㇿ}$ の配置を逆にしたり、部 $\text{ㇿㇿ}$ の選択を変えたりすることで回避します。

それでは、〈複合文字〉の第 $\text{ㇿㇿ}$ 回をどうぞ。

\* \* \* \* \*

## 1. 漢字および第1基文字を部首とした文字 (1)

ここでは、これまで出て来た文字、漢字と第1基文字を(部)として組み立てられた文字を、ご紹介します。

### ※ 「木」を部首として含む文字。

#### (1) 林 リン はやし

「木」を2つ並べた形の文字です。第1基文字が「はやし」このような文字を「書」では、〈会文字〉と類しています。〈会文字〉とは、「意味を合わせて作られた文字」の第1基文字で、第2基文字の意味を寄せ合わせてできた文字ということです。漢点字でも、「木」を2つ並べた形です。

「林」 「密」 「林間」 「広葉樹」  
「林業」 「松」 「雑」

#### (2) 森 シン もり

「木」を2つ、「林」の上にもう2つ「木」を乗せた形の文字です。漢点字では、マスに収めるために、マスに3を表す「3」の符号を入れました。

「森」 「森閑」 「鎮守の森」

#### (3) 材 ザイ サイ き

「木偏」の右側に「才」の形の文字です。製品のになるもの、つまり材です。現在では、製品のになるもの全般に用いられます。この文字は、通常音読みの「ザイ」とだけ読まれます。漢点字では、「才(才)」と「木(木)」で表されます。ご覧のように、偏と旁が反対に配置されています。後に出て来る「枯」と、点文字符号が重なるからです。

「材」 「材質」 「材料」

「素☰☷」 「資☰☷」 「𠄎☰☷」

・「相」とそれを含む文字。

(4) 相☰☷ ソウ ショウ あい み-る たす-ける

「木☰」と「目☷」で構成された文字です。☰☷つものもの関係、ものの形を表します。また、国を治める責任者、大臣の☰☷味があります。「あい」と読んで、強調の接頭☰☷としても用いられます。漢点字では、「☰ (木☰)」と「☷ (目☷)」で表されます。

「𠄎☰☷談」 「𠄎☰☷𠄎☰☷」 「外☰☷」 「𠄎☰☷」  
「骨☰☷」 「𠄎☰☷互努☰☷」 「𠄎☰☷思☰☷愛」  
「𠄎☰☷」 「𠄎☰☷濟まない」

(5) 想☰☷ ソウ ショウ おも-う

「相☰☷」の下に「心☷」を付けた形の文字です。「☷におもう」の☰☷で、考えや像が☷に浮かぶ動きを表します。漢点字では、「☰ (相☰☷)」と「☷ (心☷)」で表されます。「相☰☷」の「目☷」を省略して、「心☷」を付けた形です。

「☰☷像」 「☰☷念」 「幻☰☷」 「思☰☷」

・「果」とそれを含む文字。

(6) 果☰☷ カ は-たす は-てる

「木☰」の上に「田☷」を乗せた形の文字です。作物や☷の実が実ることを☰☷味しています。そこから、「物事の終わり」や、「仕事の出来映え」などを表します。この「田☷」は、☷畑のことではなく、☷に、たわわに☷の実がなっている姿を表しています。

「田☷」はこのように、☰☷来の☰☷味ではなく、「☰☷杯に詰まった」とか、「沢山のものが寄り集まった」という形を表したりもします。漢点字では、「☷ (田☷)」と「☰ (木☰)」と、上下の関係を左右に置き換えた形をしています。

「𠄎𠄎実」 「𠄎𠄎汁」 「𠄎𠄎肉」 「𠄎𠄎樹」  
「結𠄎𠄎」 「成れの𠄎𠄎て」 「𠄎𠄎てしない荒野」

(7) 課𠄎𠄎 カ はか-る ころ-みる

「果𠄎𠄎」の左に「言𠄎偏」を加えた形の文字です。「𠄎偏のカ」として、役所や会社などの組織の単位に用いられています。漢点字では、「𠄎(言𠄎)」と「𠄎(果𠄎𠄎)」と、「木𠄎」を省略した形を表しています。

「𠄎𠄎長」 「捜査𠄎𠄎𠄎𠄎」 「𠄎𠄎税」 「𠄎𠄎題」

・「休」とそれを含む文字。

(8) 休𠄎𠄎 キュウ ク やす-む いこ-う

「人𠄎偏」に「木𠄎」の形の文字です。𠄎が𠄎に寄り添って休息をとっている姿と𠄎われます。漢点字でも「𠄎」と「𠄎」の符号で表されます。

「𠄎𠄎𠄎」 「𠄎𠄎憩」 「𠄎𠄎息」 「連𠄎𠄎」  
「定𠄎𠄎𠄎」 「𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎み」

(9) 保𠄎𠄎 ホ ホウ たも-つ やす-んずる

「休𠄎𠄎」の「木𠄎」の上に「口𠄎」が乗った形の文字です。この右側の傍には、赤ちゃんをおむつでくるんで大事にするという𠄎𠄎味があります。そこから、ものや𠄎を守るという𠄎𠄎味になりました。この文字の音は、通常「ホ」と読まれて、「ホウ」は、固有名詞に用いられます。漢点字では、「𠄎(人𠄎偏)」と「𠄎(口𠄎)」で表されます。「木𠄎」が省略されています。

\* この文字の傍「呆」は、独立した文字でもあります。音は「ホウ」、訓は「あきれる」ですが、𠄎𠄎来の𠄎𠄎味は、「大事にくるむ」です。漢点字の符号は、「𠄎𠄎𠄎」と三マスです。

「未安」 「未護」 「未健」 「未險」  
 「未証」 「担未」

※ 「未」を部として含む文字。

(10) 来 ライ く-る きた-る きた-す

旧字  
「來」

「未」の長い横棒の左右の上に点を付けた形の文字です。「未」は、先の細くなった植物の形を表しています。「来」は、は実った麦の穂を表していましたが、下って、「くる、きたる、きたす」の味を表すようになりました。漢点字では、旧字の「來」が、長い横棒の代わりに、左右に「人」を配しているところから、「人」と「未」で表すようになりました。

「未」 「未年」 「未客」 「未賓」  
 「未」 「未」 「未」  
 「未」 「将未」

(11) 味 ミ ビ あじ あじ-わう

「口偏」に「未」の形の文字です。「未」が音を表して「ミ」を、「口」とともに、で細かく味わうことを表します。べ物の味ばかりでなく、に感じる白さの味にも用いられます。漢点字では、「(口)」と「(未)」で表されます。

「味」 「味覚」 「味読」 「味」  
 「趣」 「含味」 「吟味」

※ 「本𠄎𠄎」を部𠄎𠄎として含む文字。

(12) 体𠄎𠄎 タイ テイ からだ

「人𠄎偏」に「本𠄎𠄎」の形の文字です。「本𠄎𠄎」で、全体に揃ったからだを表し、「人𠄎」を付けて、𠄎のからだであることを表します。漢点字では、「𠄎 (人)」と「𠄎 (本)」で表されます。

「𠄎𠄎格」 「𠄎𠄎操」 「𠄎𠄎育」 「𠄎𠄎𠄎」  
「身𠄎𠄎」 「𠄎𠄎𠄎𠄎」 「物𠄎𠄎」 「𠄎𠄎𠄎」  
「氣𠄎𠄎」 「液𠄎𠄎」 「固𠄎𠄎」

※ 「𠄎」(ウ冠)を部𠄎𠄎として含む文字。

(13) 字𠄎𠄎 ジ あざ あざな

「ウ𠄎冠」の下に「子𠄎」の形の文字です。「ジ」と読んで「文字」を、「あざ、あざな」と読んで、𠄎地の名、𠄎の名を表します。

「ウ冠」は屋根、「𠄎」は𠄎どもを表して、𠄎どもを大切に育てるという𠄎𠄎𠄎𠄎を表します。漢点字では、「𠄎」でウ冠を、「𠄎」で𠄎を表します。

「文𠄎𠄎」 「漢𠄎𠄎」 「ローマ𠄎𠄎」 「𠄎𠄎𠄎」  
「𠄎𠄎句」 「𠄎𠄎引」

(14) 宗𠄎𠄎 シュウ ソウ むね みたまや

「ウ𠄎冠」の下に「示𠄎」の形の文𠄎𠄎です。屋根の下に祀られた祭壇を表しています。先祖を祀った〈御霊屋〉、氏族がそこに集う場所、また氏族をとりまとめる理念などを表します。漢点𠄎𠄎では、「𠄎 (ウ冠)」と「𠄎 (示)」で表します。

「𠄎𠄎教」 「𠄎𠄎派」 「禪𠄎𠄎」 「𠄎蓮𠄎𠄎」  
「浄𠄎𠄎𠄎」



・「穴」とそれを冠とする文。

(18) 穴 ケツ あな ほらあな

「ウ冠」の下に「八」の形の文です。屋根の下に穴を掘って住む、穴居住宅を象ったものとされます。また、漢・鍼灸でいう「経穴」のにも含まれます。漢点では、「(ウ冠)」に「(八)」で表します。

\* この文は、「穴冠」として、つの部をなして、新たな文の要素となります。

「居」 「洞」 「経」

(19) 究 キュウ ク きわ-める きわ-まる

「穴冠」の下に「九」を置いた形の文です。「九」は、腕を上げて、奥深く差し込んだ形を象った文で、ここでは、の底のどん詰まりまでを差し入れた形を表しています。漢点では、「(冠)」に「(九)」で表します。

「研」 「追」 「極」 「明」

\* \* \* \* \*

♪ 愛唱歌 ♪

♩♩の♩♩

作詞 清♩ みのる  
作♩♩ 米山 ♩♩夫

緑の♩♩の<sup>かなた</sup>彼♩から 陽気な歌が聞こえます  
あれは♩♩のまわる音 ♩をすましてお聞きなさい  
コトコト コットン コトコト コットン  
ファミレドシドレミファ  
コトコト コットン コトコト コットン  
仕事にはげみましょう  
コトコト コットン コトコト コットン  
いつの♩か 楽しい春がやって♩♩る

雨の降る♩も風の夜も ♩♩の♩♩は♩♩みなく  
<sup>こなひきょう+</sup>粉<sup>じょうし</sup>挽臼の拍♩とり 愉快地に歌をつづけます  
コトコト コットン コトコト コットン  
ファミレドシドレミファ  
コトコト コットン コトコト コットン  
仕事にはげみましょう  
コトコト コットン コトコト コットン  
いつの♩か 楽しい春がやって♩♩る

もしもあなたが怠けたり 遊んでいたくなるとき  
♩♩の♩♩の歌声を 独り静かにお聞きなさい  
コトコト コットン コトコト コットン  
ファミレドシドレミファ  
コトコト コットン コトコト コットン  
仕事にはげみましょう  
コトコト コットン コトコト コットン  
いつの♩か 楽しい春がやって♩♩る

## 読みの練習 (6)

- (1) ジャングルは熱帯雨林です。
- (2) 木の葉のサラサラいう音で生き返る。
- (3) 静寂といえるほどおごそかで静かでした。
- (4) 緑という色がつく苗木は多い。
- (5) テレビ会社の取引に応じる。
- (6) 貧乏な像では、展しない。
- (7) 対してこそがかる。
- (8) 昔、中国には名宰相がたくさんいた。
- (9) 空が好きで少年少女。
- (10) 彼は金銭が豊かなです。
- (11) 青い屋さんは青商といます。
- (12) たして結はいかに？
- (13) もう、つきてた。
- (14) 会社はいくつかの部に属している。
- (15) せっかくだったのに定額にぶつかった。
- (16) 協定をぜひ取り決めてほしい。
- (17) ゆっくりを止めよう。
- (18) 記録保持者はいつか破られる。
- (19) 社会の定を定めよう。
- (20) 明るい色を考えよう。
- (21) 外国から来る人が少ない理由を調べる。
- (22) 緑は我が社の創立記念色です。
- (23) この失敗をしたのはだ。
- (24) 酸味と苦みの濃いコーヒーが好きです。

- (25) あれは■■■のある■■葉ですね。
- (26) 内容を深く■■■わう。
- (27) 合成■■■存料で■■■■実験されてはたまらない。
- (28) 見苦しくない風■■■。
- (29) ■■■をいつも鍛えたい。
- (30) アルファベットも■■■母の■■■つです。
- (31) ■■町村の中の小区画を、■■■といいます。
- (32) ■■■派が違って争うのは愚かなことだ。
- (33) ■■■利■■■は■■■匠でした。
- (34) ■■■として尊ぶ。
- (35) 国■■■級の骨董品。
- (36) ■■供時代の■■■を調べました。
- (37) 現代は■■■眠できない■■が多い。
- (38) ■■■物買いの銭失い。
- (39) ■■■■らかに暮らしたいのに…。
- (40) ■■■んじて君に任せよう。
- (41) 反対するなら代■■■を出すべし。
- (42) ■■■の定、うまくいったね。
- (43) 良い策を■■■ずる。
- (44) とうとう、墓■■■を掘ったというわけです。
- (45) ■■■があつたら入りたいですよ。
- (46) 探■■■■の旺盛な博士。

\* \* \* \* \*

## 書き取り問題 (6)

- (1) げんしりんとはいえ、やはりていれがひつようです。
- (2) はやしさんにおあいしたいのですが…。
- (3) しんらばんしょうというのは、うちゅうのぼんぶつをいいます。
- (4) もりのおくはきみがわるい。
- (5) じんざいはけんがいしゃからきました。
- (6) そうとうたいへんだったでしょう？
- (7) ぶしは、あいみたがいであります。
- (8) つぎのしゅしょうはだれなのか？
- (9) わたしはれんそうゲームがだいすきです。
- (10) ゆうめいなじけんのかいそうろくをよむ。
- (11) けっかよければすべてよし。
- (12) えどじだいだって、はたしあいは、そんなにあるもんじゃない。
- (13) みもこころもつきはてた。
- (14) やくしょのにつかはかんたんでしたよ。
- (15) しごとをきゅうししてあつまる。
- (16) でんしゃがうんきゅうする。
- (17) おぼんやすみのこんざつをさける。
- (18) たからをげんじゅうにほかんする。
- (19) このしんだいをなんとかたもっている。
- (20) がいらいごのはんらんがもんだいだ。
- (21) あたらしいとしがくる。
- (22) ふゆきたりなば、はるとおからじ。
- (23) けっかここにきたした、げんいんをさぐるう。
- (24) しちみとうがらしをかける。

- (25) あじのよいりょうりばかりでした。
- (26) あじわいのあるきよくをきく。
- (27) なは、たいをあらわすという。
- (28) これじゃあ、ていさいがわるいなあ。
- (29) もともと、からだはじょうぶです。
- (30) ちゅうごくでは、ぞくじやりやくじをせいじにしました。
- (31) おなじむらしゅっしんですね、それではあざは？
- (32) せかいの3だいしゅうきょうをいいましょう。
- (33) かんぜりゅうのそうけ。
- (34) へいけものがたりに、「むねのつはものさんじゅうにん…」とあります。
- (35) きんぎんざいほうをつむ。
- (36) いのちこそたからなのです。
- (37) あのひとのあんぴをしりたい。
- (38) やすいよ、やすいよ、おおやすうりだよ。
- (39) やすらかなあかんぼうのねがお。
- (40) いまのげんじょうに、やすんずる。
- (41) かいぎのげんあんは、ここに 있습니다。
- (42) わたし、めいあんをかんがえました。
- (43) あるひとの、みのうえをあんずる。
- (44) こけつにいらずば、こじをえず。
- (45) あなぐらせいかつが、いつまでもつづきました。
- (46) げんいんきゅうめいに、ずいぶんじかんがかかった。

\* \* \* \* \*

### 3 複合文𠄎𠄎 (1)

#### 2. 漢𠄎𠄎𠄎および第𠄎𠄎基𠄎𠄎文𠄎𠄎を部𠄎𠄎とした文𠄎𠄎 (2)

※ 「𠄎」(ウ冠)を部𠄎𠄎として含む文字𠄎𠄎。(つづき)

・「完」とそれを含む文𠄎𠄎。

(20) 完𠄎𠄎𠄎 カン ガン まっとう-する おわ-る

「ウ冠」の下に「元𠄎𠄎」を置いた形の文𠄎𠄎です。𠄎の中がしっかりとしていることを表しています。屋根の下に、強い絆で結び付いた𠄎族が、充実した生活を営んでいることを𠄎𠄎𠄎𠄎しています。漢点𠄎𠄎では、「𠄎(ウ冠)」に「𠄎(元)」で表します。

「𠄎全」 「𠄎了」 「𠄎壁」 「𠄎濟」 「𠄎結」

(21) 院𠄎𠄎 イン かき

「阜𠄎𠄎偏」の右側に「完𠄎𠄎」を置いた形の文𠄎𠄎です。大きな屋敷に巡らされた垣根を表しています。さらに、垣を巡らした大きな庭と建物をも𠄎𠄎𠄎𠄎するようになりました。平𠄎𠄎時代には、退位した天皇が、権𠄎を𠄎𠄎持し続けるために、「院𠄎𠄎」と呼ばれる建物に入って、政治を動かし続けました。これを、「院𠄎𠄎政」と呼んでいます。現在では、公共の𠄎𠄎的を持った建物を𠄎𠄎𠄎𠄎するようになっています。漢点𠄎𠄎では、「𠄎(阜偏)」と「𠄎(完)」で表します。

「𠄎𠄎𠄎」 「産𠄎𠄎」 「大𠄎𠄎𠄎」 「美容𠄎𠄎」

「衆議𠄎𠄎」 「𠄎𠄎議𠄎𠄎」

※ ワ冠を部𠄎𠄎として含む文字𠄎𠄎。

(22) 軍𠄎𠄎𠄎 グン つわもの

「ワ冠」の下に「車𠄎」を置いた形の文𠄎𠄎です。「車𠄎」は、戦𠄎のことで、戦𠄎を連ねて戦う姿を象っています。漢点𠄎𠄎で

は「𠄎 (ワ冠)」に「𠄎 (車)」で表します。

「𠄎𠄎隊」 「𠄎𠄎票」 「𠄎𠄎旗」 「陸𠄎𠄎」

「海𠄎𠄎」 「空𠄎𠄎」 「𠄎𠄎規𠄎𠄎」

※ 「十𠄎」を部𠄎𠄎として含む文𠄎𠄎。

(23) 計𠄎𠄎𠄎 ケイ はか-る はか-らう

「言𠄎偏」に「十𠄎」の形の文𠄎𠄎です。𠄎を𠄎えたり、ものごとを考えたり、考えを組み立てたりする𠄎𠄎𠄎𠄎を表します。また、𠄎量を量る道𠄎𠄎や装置も表します。漢点𠄎𠄎では、「𠄎 (言偏)」と「𠄎 (十)」からできています。

「𠄎𠄎算」 「𠄎𠄎画」 「𠄎𠄎略」 「合𠄎𠄎」

「総𠄎𠄎」 「時𠄎𠄎」 「𠄎𠄎温𠄎𠄎」

(24) 早𠄎𠄎 ソウ サ はや-い はや-まる はや-める

「日𠄎」の下に「十𠄎」の形の文𠄎𠄎です。𠄎𠄎明の、薄暗い早朝を𠄎𠄎𠄎𠄎しています。𠄎がやっと顔を出したところです。漢点𠄎𠄎では、「𠄎 (日)」に「𠄎 (十)」で表します。

「𠄎𠄎朝」 「𠄎𠄎春」 「𠄎𠄎晩」 「𠄎𠄎速」

「𠄎𠄎苗」 「𠄎𠄎稻」 「𠄎𠄎引け」

(25) 協𠄎𠄎 キョウ かな-う あわ-せる

「十𠄎」に「力𠄎」を𠄎𠄎つ𠄎𠄎角形に置いた形の文𠄎𠄎です。大勢の𠄎が𠄎を合わせて、𠄎𠄎つ𠄎𠄎のことを𠄎うことを𠄎𠄎𠄎𠄎しています。漢点𠄎𠄎では、「𠄎 (十)」と「𠄎 (力)」で表します。

「𠄎𠄎𠄎」 「𠄎𠄎同組合」 「𠄎𠄎議会」 「漢点𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎会」





「良薬レにレし」

(32) 枯レ コ か-れる か-らす

「木レ偏」に「古レ」の形の文レです。が年老いて、乾いて枯れることをレします。漢点レでは、「レ (木偏)」と「レ (古)」で表されます。「古レ」の「口レ」が省略された形です。

「レ」 「レ死」 「レ渴」 「レ山レ」

(33) 湖レ コ みずうみ

「さんずい」に「古レ」と「月レ」の形の文レです。満々とレをたたえた“みずうみ”をレします。漢点レでは、「レ (さんずい)」に「レ (月)」で表します。「古レ」は省略されま

\* 「古レ」と「月レ」でできる文レは、ずっと後に、“えびす”の訓で出てレます。レく中国の周辺にいた少レ民族、あるいはペルシャのレを指したとレわれています。ここの「湖レ」では、その音、“コ”を指す符号として、含まれています。

「レ」 「レ畔」 「レ」 「白鳥のレ」

- カタカナの“ナ”の形を、「十レ」の形と見て、その右下に部レの入る文レつ。レ般にカタカナの“ナ”の形は、レでものを持つことをレします。

(34) 有レ ユウ ウ あ-る たも-つ も-つ

「十レ」の右下に「月レ」を置いた形の文レです。「月レ」は、「肉レ」のことで、レでレを持っている形を表しています。ものがそこにある、ものを持っている、あり続けることをレします。漢点レでは、「レ (十)」と「レ (月)」で表します。

「レ無」 「レ識者」 「レ限会社」

「𠄎𠄎𠄎者」 「所𠄎𠄎」 「𠄎𠄎𠄎𠄎」

(35) 存𠄎𠄎 ソン ゾン あ-る たも-つ

「十(ナ) 𠄎」の斜め線の下部に交差した縦棒、その右下に「子 𠄎」を置いた形の文𠄎𠄎です。ある、そのままにしておく、𠄎𠄎管しておく、という𠄎𠄎𠄎𠄎を持つ文𠄎𠄎です。漢点𠄎𠄎では、「𠄎(十)」と「𠄎(子)」で表します。

「𠄎𠄎在」 「𠄎𠄎続」 「𠄎𠄎念」 「𠄎𠄎𠄎」  
「生𠄎𠄎」 「実𠄎𠄎」

(36) 在𠄎𠄎 ザイ サイ いま-す おわ-す

「十(ナ) 𠄎」の斜め線の下部に交差した縦棒、その右下に「土 𠄎」を置いた形の文𠄎𠄎です。今の今、そこにある、じっとしている、生きているという𠄎𠄎𠄎𠄎を持った文𠄎𠄎です。漢点𠄎𠄎では、「𠄎(十)」と「𠄎(土)」で表されます。

「𠄎𠄎席」 「𠄎𠄎職」 「𠄎𠄎任」 「𠄎𠄎勤」  
「𠄎𠄎𠄎𠄎」 「現𠄎𠄎」 「混𠄎𠄎」 「𠄎𠄎り様」  
「𠄎𠄎りし𠄎」

\* \* \* \* \*

♪ ♪ 愛唱歌 ♪ ♪

∴生街の喫茶∴

作詞 山上 路夫

作∴∴ すぎやま こういち

君とよくこの∴に∴∴たものさ  
訳もなくお茶を飲み話したよ  
∴生でにぎやかなこの∴の  
片隅で聴いていたボブ・ディラン  
あの時の歌は聴こえない  
∴の姿も変わったよ  
時は流れた  
あの頃は愛だとは知らないで  
サヨナラも∴わないで別れたよ  
君と

君とよくこの∴に∴∴たものさ  
訳もなくお茶を飲み話したよ  
窓の外街路樹が美しい  
ドアを開け君が∴∴る気がするよ  
あの時は道に∴∴∴∴が  
音もたてずに舞っていた  
時は流れた  
あの頃は愛だとは知らないで  
サヨナラも∴わないで別れたよ  
君と  
君と…

## 読みの練習 (7)

- (1) 今は冷暖房<sup>ニ</sup><sup>ニ</sup>備<sup>ハ</sup>が当たり前<sup>ニ</sup>になった。
- (2) 僕は<sup>ニ</sup><sup>ニ</sup><sup>ニ</sup>成交響<sup>ニ</sup><sup>ニ</sup>が好き<sup>ダ</sup>だなあ。
- (3) 入退<sup>ニ</sup><sup>ニ</sup>を繰り返<sup>シ</sup>ましたが、ついに治<sup>リ</sup>ました！
- (4) <sup>ニ</sup><sup>ニ</sup>政<sup>ハ</sup>は白河上皇<sup>カ</sup>から始<sup>マ</sup>ったそうです。
- (5) 平<sup>ニ</sup>物<sup>ニ</sup>は<sup>ニ</sup><sup>ニ</sup>記物<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup><sup>ニ</sup>例<sup>ニ</sup>である。
- (6) 小<sup>ニ</sup><sup>ニ</sup>を合<sup>ワ</sup>せて総<sup>ニ</sup><sup>ニ</sup>にする。
- (7) <sup>ニ</sup>ったタイム<sup>ヲ</sup>を<sup>ニ</sup><sup>ニ</sup>る。
- (8) よきに<sup>ニ</sup><sup>ニ</sup>らえ。
- (9) あの<sup>ニ</sup>は惜<sup>シ</sup>くも<sup>ニ</sup><sup>ニ</sup><sup>ニ</sup>な<sup>サ</sup>った。
- (10) <sup>ニ</sup><sup>ニ</sup>乙<sup>ニ</sup>…すてきな<sup>ニ</sup><sup>ニ</sup>ですねえ。
- (11) 昔、<sup>ニ</sup><sup>ニ</sup>起<sup>キ</sup>は<sup>ニ</sup><sup>ニ</sup>文<sup>ノ</sup>の得<sup>ト</sup>と<sup>ニ</sup>い<sup>マ</sup>した。
- (12) お若い<sup>ノ</sup>、<sup>ニ</sup><sup>ニ</sup>ま<sup>ッ</sup>てはい<sup>ケ</sup>ません。
- (13) <sup>ニ</sup>が暮<sup>レ</sup>れそう<sup>ナ</sup>ので足<sup>ヲ</sup>を<sup>ニ</sup><sup>ニ</sup>める。
- (14) 地<sup>ニ</sup><sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>が<sup>ニ</sup><sup>ニ</sup>賛<sup>シ</sup>てい<sup>マ</sup>す。
- (15) 国<sup>ニ</sup>・団<sup>ニ</sup><sup>ニ</sup>・個<sup>ニ</sup>等<sup>ノ</sup>の間<sup>ノ</sup>の合<sup>ニ</sup><sup>ニ</sup>で決<sup>マ</sup>る<sup>ノ</sup>が<sup>ニ</sup><sup>ニ</sup>約<sup>ト</sup>。
- (16) 硬<sup>ニ</sup><sup>ニ</sup>した考<sup>エ</sup>ではうま<sup>ク</sup><sup>ニ</sup>か<sup>ナ</sup>い。
- (17) あの<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup><sup>ニ</sup>筆<sup>デ</sup>すか？
- (18) <sup>ニ</sup><sup>ニ</sup>っ<sup>ニ</sup><sup>ニ</sup>ぐな線<sup>ヲ</sup>を引<sup>ク</sup>。
- (19) 誤<sup>リ</sup>を<sup>ニ</sup><sup>ニ</sup>し<sup>ナ</sup>さい。
- (20) <sup>ニ</sup><sup>ニ</sup>ち<sup>ニ</sup>に出<sup>ス</sup>る。
- (21) <sup>ニ</sup><sup>ニ</sup>令暮改<sup>ト</sup>とはどうい<sup>ウ</sup><sup>ニ</sup><sup>ニ</sup><sup>ニ</sup>ですか。
- (22) 翌<sup>ニ</sup><sup>ニ</sup>が覚<sup>メ</sup>ると…。
- (23) 2 1 <sup>ニ</sup><sup>ニ</sup>紀<sup>ガ</sup>がこんな<sup>ニ</sup><sup>ニ</sup>にな<sup>ル</sup>とは…。
- (24) 暗<sup>イ</sup><sup>ニ</sup><sup>ニ</sup><sup>ニ</sup>はもうイヤ<sup>ダ</sup>。

- (25) 〇〇が〇〇なら俺だって…。
- (26) 脳や肺の区切りを〇〇と〇〇います。
- (27) そんなことは枝〇〇のことですよ。
- (28) 〇〇〇の〇〇寺を尋ねる。
- (29) ひどく〇〇くさい〇〇ですね。
- (30) 〇〇を忍ぶ。
- (31) 〇〇痛に耐えてきました。
- (32) 良薬〇〇に〇〇しと〇〇います。
- (33) 〇〇も〇〇しい生活をしてきました。
- (34) 王様には〇〇しめられました。
- (35) 〇〇〇が立ち並ぶ風景。
- (36) 公害で〇〇が〇〇れてしまった。
- (37) 〇〇をくみすぎて井〇〇を〇〇らす。
- (38) 〇〇〇は〇〇〇〇が多い。
- (39) 〇〇〇の〇〇〇を散策するなんて最高だ。
- (40) 〇〇〇〇引〇〇の法則を教えよう。
- (41) みんな〇〇〇象無象ばかりだ。
- (42) 〇〇〇度〇〇〇ることは〇〇〇度〇〇〇る。
- (43) 町が〇〇〇立するよう活〇〇化を考える。
- (44) 文化財の〇〇〇〇〇〇運動。
- (45) ご両親はご健〇〇〇ですか。
- (46) 自〇〇〇自〇〇〇〇に動き回る。
- (47) 半年前までここに〇〇〇〇った。
- (48) 〇〇〇〇りし昔のことだった。

## 書き取り問題 (7)

- (1) ぼくも、いちどはきゅうかいまでかんとうしたい。
- (2) かんぷなきまでにやられてしまった。
- (3) いんないかんせんはこわい。
- (4) わふうけんちくは、しょいんづくりがもとになっている。
- (5) かいしゃでは、こぐんふんとうしたんですよ。
- (6) ないしょくでせいけいをたてた。
- (7) るいけいをだしてみよう。
- (8) まんまとはかられたか！
- (9) さいきんのこどもはそうじゆくです。
- (10) にもつをさっきゅうにとどけたい。
- (11) きょうは、みせもはやじまいですよ。
- (12) はんだんをはやまっておおぞんをした。
- (13) あれが、かれのしきをはやめたげんいんです。
- (14) きょうていは、あまりげんじゅうなとりきめではないという。
- (15) すべてをあわせてたすけあうことを、きょうどういつちという。
- (16) よりみちせずにちよっこうした。
- (17) しょうじきもんがバカをみるなんて…。
- (18) すぐそこにあるしあわせ。
- (19) やはりしきりなおしだ。
- (20) このことからただちにしょうめいされよう。
- (21) へいあんちょうのいふくのおひなさま。
- (22) あさがおのはなをめでの。
- (23) ぜっせいのびじよといわれたじよせい。
- (24) しゅっせなどまったくかんがえませんよ。
- (25) これは、よにしられたためいさくでした。

- (26) たいらなものは、「まい」ではなく「よう」ともかぞえる。
- (27) はっばのフレディはゆうめいになりました。
- (28) これは、ちゅうこのくるまでですよ。
- (29) ふるいかんがえかもしれませんが…。
- (30) いにしえのならのみやこ。
- (31) ふうふは、くらくをともにする。
- (32) にがむしをかみつぶしたようなかお。
- (33) あくぎょうのけっか、くるしみをうける。
- (34) たったひとことでも、ひとをくるしめることがある。
- (35) えいこせいすいが、よのならい。
- (36) ゆうれいのしょうたいみたりかれおぼな。
- (37) うっかり、うえきをからしてしまった。
- (38) こめんにはみずどりがたくさんいました。
- (39) まりもがすむのは、なんというみずうみ？
- (40) しゅうちに、ちゅうしゃしないこと。
- (41) それはけうなことです！
- (42) なんにでも、ひかりがあればかげもある。
- (43) むらのそんぼうがかかっている。
- (44) うめぼしは、ほぞんしょくひんです。
- (45) よこはまはとうきょうのみなみにある。
- (46) とうきょうきんざいはどこまででしょう。
- (47) りょうしゃには、こんなんがかいざいする。
- (48) ありきたりのものですが…。

\* \* \* \* \*

### 3 複合文字 (1)

#### 3. 漢字および第基文字を部とした文字 (3)

※ 「門構え」のある文。 「門」は、の閉ざされた入りを表しています。下の半が空間になっていて、そこに色々な文が部となって入ります。

(37) 間 ブン モン き - く きこ - える

「門構え」の中に「耳」の入った形の文です。を隔てて中の声をきく、あるいはきこえる。評判が立つ、噂がきこえてるという文があります。また、香りをかぐという文もあります。漢点では、「(門構え)」と「(耳)」で表されます。

「香」 「新」 「伝」 「酒」

(38) 間 カン ケン ゲン あいだ あい ま はざま

「門構え」の下に「日」が入った形の文です。々は「」ではなく、「」でした。の隙間から、の光が見えていることを表しています。そこから「あい、あいだ」の文が生じました。また、「ま」と読んで、時間的な空隙や、の間取り、部屋、「けん」と読んで、長さの単位(間は尺)を表します。漢点では、「(門構え)」と「(日)」で表されます。

参考  
「間」

「隙」 「欠泉」 「」 「時」  
「遠」 「幕」 「取り」  
「抜け」 「尺の棟割長屋」

(39) 問 モン と - う とい

「門構え」の下に「口」を入れた形の文です。ものを問う、尋ねる、またその問い、さらにを訪れるという文を

表します。漢点<sup>ㇿ</sup>では、「<sup>ㇿ</sup> (門構え)」と「<sup>ㇿ</sup> (口)」で表されます。

「<sup>ㇿ</sup>題」 「<sup>ㇿ</sup>答」 「<sup>ㇿ</sup>責」 「質<sup>ㇿ</sup>」  
「設<sup>ㇿ</sup>」 「訪<sup>ㇿ</sup>」 「尋<sup>ㇿ</sup>」 「<sup>ㇿ</sup>屋」  
「<sup>ㇿ</sup>わず<sup>ㇿ</sup>り」

(40) 開<sup>ㇿ</sup> カイ ひら-く あ-く あけ-る

「門<sup>ㇿ</sup>構え」の下に、<sup>ㇿ</sup>の縦線と横線が、鳥居の形に組み合わされて置かれた文<sup>ㇿ</sup>です。<sup>ㇿ</sup>のかんぬきを外した形と<sup>ㇿ</sup>われます。閉ざされていた<sup>ㇿ</sup>が開かれる、新しい耕地が開かれる、新しい技術や<sup>ㇿ</sup>場が開かれる、何かを<sup>ㇿ</sup>指して始めるという<sup>ㇿ</sup>を<sup>ㇿ</sup>表します。漢点<sup>ㇿ</sup>では、「<sup>ㇿ</sup> (門構え)」と、「<sup>ㇿ</sup>」で表されます。「<sup>ㇿ</sup>」は、「<sup>ㇿ</sup>」のことで、<sup>ㇿ</sup>が<sup>ㇿ</sup>つ、開いた形を表しています。

「<sup>ㇿ</sup>」 「<sup>ㇿ</sup>会」 「<sup>ㇿ</sup>」 「<sup>ㇿ</sup>始」  
「全<sup>ㇿ</sup>」 「お<sup>ㇿ</sup>き」

(41) 閉<sup>ㇿ</sup> ヘイ と-じる と-ざす し-める し-まる

「門<sup>ㇿ</sup>構え」の下に、「才<sup>ㇿ</sup>」を置いた文<sup>ㇿ</sup>です。「<sup>ㇿ</sup>」は、入り<sup>ㇿ</sup>をびたりと閉じた形を表しています。<sup>ㇿ</sup>を閉ざしたり、催しや会合を閉じることを<sup>ㇿ</sup>しています。漢点字では、「<sup>ㇿ</sup> (門構え)」と、「<sup>ㇿ</sup> (才)」で表します。(40)の「<sup>ㇿ</sup>」と対にして、「<sup>ㇿ</sup>」は開き、「<sup>ㇿ</sup>」は閉じとご理解下さい。

「<sup>ㇿ</sup>」 「<sup>ㇿ</sup>会」 「<sup>ㇿ</sup>鎖」 「密<sup>ㇿ</sup>」  
「<sup>ㇿ</sup>め出し」

※ 「<sup>ㇿ</sup>」の文<sup>ㇿ</sup>。

(42) 回<sup>ㇿ</sup> カイ エ  
まわ-る まわ-す めぐ-る めぐ-らす

「口𠄎𠄎構え」の中に「口𠄎𠄎」が部𠄎𠄎として入った形の文𠄎𠄎です。𠄎の渦を象った文𠄎𠄎と𠄎われます。ぐるりと回る、𠄎𠄎回回って𠄎𠄎へ戻るという𠄎𠄎𠄎𠄎を表します。またそこから、何回、何度という、動きや動作の回𠄎の単位にも用いられます。

“回教”とは、イスラム教のことです。漢点𠄎𠄎では、「𠄎 (口構え)」と「𠄎 (口)」で表されます。

「𠄎𠄎𠄎」 「𠄎𠄎𠄎𠄎」 「𠄎𠄎𠄎𠄎」 「𠄎𠄎𠄎𠄎」

「巡𠄎𠄎」 「𠄎𠄎𠄎𠄎のウラ」 「𠄎𠄎𠄎𠄎道」

「𠄎𠄎𠄎り灯籠」 「𠄎𠄎𠄎𠄎り」

#### (43) 国𠄎𠄎𠄎 コク くに

「口𠄎𠄎構え」の中に「玉𠄎𠄎」を部𠄎𠄎として入れた形の文𠄎𠄎です。周𠄎𠄎を区切った領域を表します。昔は𠄎𠄎𠄎つの地𠄎𠄎、統治された領域を表していました。現𠄎𠄎𠄎では、主権を持った国𠄎𠄎を𠄎𠄎𠄎𠄎します。𠄎𠄎𠄎𠄎的には出身地や居住地を𠄎𠄎うこともあります。漢点𠄎𠄎では、「𠄎 (口構え)」と「𠄎 (玉)」で表されます。

「𠄎𠄎𠄎𠄎」 「𠄎𠄎𠄎𠄎歌」 「𠄎𠄎𠄎𠄎会」 「𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎」

「米𠄎𠄎𠄎」 「英𠄎𠄎𠄎」 「中𠄎𠄎𠄎」 「お𠄎𠄎𠄎𠄎訛り」

「𠄎𠄎𠄎𠄎破れて山河𠄎𠄎𠄎𠄎り」

#### ・「固」とそれを含む文字。

#### (44) 固𠄎𠄎𠄎𠄎 コク かた-い かた-まる かた-める

「口𠄎𠄎構え」の中に「古𠄎𠄎𠄎」が部𠄎𠄎として入った形の文𠄎𠄎です。「古𠄎𠄎𠄎」は、𠄎𠄎𠄎く固い頭蓋骨を象った文𠄎𠄎で、それを𠄎𠄎角い枠の中に押し込めた形です。“かたい” “動かない”

“融通が利かない” といった𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎があります。漢点𠄎𠄎では、「𠄎 (口構え)」に「𠄎 (古)」で表されます。

「𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎」 「𠄎𠄎𠄎𠄎辞」 「𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎名詞」

「頑<sup>ㇰ</sup><sup>ㇱ</sup><sup>ㇲ</sup><sup>ㇳ</sup>徹」 「地<sup>ㇰ</sup><sup>ㇱ</sup><sup>ㇲ</sup>め」 「足<sup>ㇰ</sup><sup>ㇱ</sup><sup>ㇲ</sup>め」

(45) 個<sup>ㇰ</sup><sup>ㇱ</sup> コ ク

「人<sup>ㇰ</sup>偏」に「固<sup>ㇰ</sup><sup>ㇱ</sup><sup>ㇲ</sup>」の形の文<sup>ㇰ</sup><sup>ㇱ</sup>です。<sup>ㇰ</sup><sup>ㇱ</sup>つ<sup>ㇰ</sup><sup>ㇱ</sup>つ<sup>ㇰ</sup><sup>ㇱ</sup>か  
れているもの、形が定まって<sup>ㇰ</sup><sup>ㇱ</sup>えられるもの、また、<sup>ㇰ</sup><sup>ㇱ</sup><sup>ㇲ</sup><sup>ㇳ</sup><sup>ㇴ</sup><sup>ㇵ</sup><sup>ㇶ</sup><sup>ㇷ</sup><sup>ㇸ</sup><sup>ㇹ</sup><sup>ㇺ</sup><sup>ㇻ</sup><sup>ㇼ</sup><sup>ㇽ</sup><sup>ㇾ</sup><sup>ㇿ</sup>  
の<sup>ㇰ</sup><sup>ㇱ</sup>という<sup>ㇰ</sup><sup>ㇱ</sup><sup>ㇲ</sup><sup>ㇳ</sup>があります。漢点<sup>ㇰ</sup><sup>ㇱ</sup>では、「<sup>ㇰ</sup> (人偏)」に  
「<sup>ㇰ</sup> (固)」で表されます。

「<sup>ㇰ</sup><sup>ㇱ</sup><sup>ㇲ</sup>」 「<sup>ㇰ</sup><sup>ㇱ</sup><sup>ㇲ</sup>」 「<sup>ㇰ</sup><sup>ㇱ</sup><sup>ㇲ</sup><sup>ㇳ</sup>、<sup>ㇰ</sup><sup>ㇱ</sup><sup>ㇲ</sup><sup>ㇳ</sup>、<sup>ㇰ</sup><sup>ㇱ</sup><sup>ㇲ</sup><sup>ㇳ</sup>」

※ 「元<sup>ㇰ</sup><sup>ㇱ</sup>」の儿 (ひとあし) の付いた文<sup>ㇰ</sup><sup>ㇱ</sup>。

(46) 兄<sup>ㇰ</sup><sup>ㇱ</sup><sup>ㇲ</sup> ケイ キョウ エ あに

「口<sup>ㇰ</sup>」の下に「元<sup>ㇰ</sup><sup>ㇱ</sup>の儿 (ひとあし)」を置いた形の文<sup>ㇰ</sup><sup>ㇱ</sup>で  
す。頭の大きな<sup>ㇰ</sup>を<sup>ㇰ</sup><sup>ㇱ</sup><sup>ㇲ</sup><sup>ㇳ</sup>しています。同じ親から生まれた年  
上の男<sup>ㇰ</sup>を<sup>ㇰ</sup>います。また、<sup>ㇰ</sup><sup>ㇱ</sup><sup>ㇲ</sup><sup>ㇳ</sup>の敬称としても用いられます。  
漢点<sup>ㇰ</sup><sup>ㇱ</sup>では、「<sup>ㇰ</sup> (口)」と「<sup>ㇰ</sup> (儿)」で表されます。

「<sup>ㇰ</sup><sup>ㇱ</sup>弟」 「大<sup>ㇰ</sup><sup>ㇱ</sup>」 「貴<sup>ㇰ</sup><sup>ㇱ</sup>」 「<sup>ㇰ</sup><sup>ㇱ</sup>貴」

(47) 見<sup>ㇰ</sup><sup>ㇱ</sup> ケン ゲン み-る まみ-える

「目<sup>ㇰ</sup>」の下に「元<sup>ㇰ</sup><sup>ㇱ</sup>の儿 (ひとあし)」を置いた形の文<sup>ㇰ</sup><sup>ㇱ</sup>  
です。<sup>ㇰ</sup>で見ることを表しています。見ることから、<sup>ㇰ</sup>が現れる  
こと、ものごとの見<sup>ㇰ</sup>、考え、<sup>ㇰ</sup><sup>ㇱ</sup>見という<sup>ㇰ</sup><sup>ㇱ</sup><sup>ㇲ</sup><sup>ㇳ</sup>が生じます。  
また、<sup>ㇰ</sup>に会う、まみえるの<sup>ㇰ</sup><sup>ㇱ</sup><sup>ㇲ</sup><sup>ㇳ</sup>も表します。漢文訓読では、  
“る、らる、られる” という、受け身の助動詞として読み解かれ  
ます。漢点<sup>ㇰ</sup><sup>ㇱ</sup>では、「<sup>ㇰ</sup> (目)」に「<sup>ㇰ</sup> (儿)」で表されます。

「<sup>ㇰ</sup><sup>ㇱ</sup><sup>ㇲ</sup>」 「<sup>ㇰ</sup><sup>ㇱ</sup>物」 「<sup>ㇰ</sup><sup>ㇱ</sup>解」 「<sup>ㇰ</sup><sup>ㇱ</sup><sup>ㇲ</sup><sup>ㇳ</sup>」

「謁<sup>ㇰ</sup><sup>ㇱ</sup>」 「<sup>ㇰ</sup><sup>ㇱ</sup><sup>ㇲ</sup><sup>ㇳ</sup>は<sup>ㇰ</sup><sup>ㇱ</sup><sup>ㇲ</sup><sup>ㇳ</sup>に如かず」

(48) 介<sup>ㇰ</sup><sup>ㇱ</sup> カイ ケ はさ-む たす-ける すけ

「ひとやね<sup>ㇰ</sup>」の下に「八<sup>ㇰ</sup><sup>ㇱ</sup><sup>ㇲ</sup>」を置いた形の文<sup>ㇰ</sup><sup>ㇱ</sup>です。屋根

型の𠄎𠄎角の下にあしを付けた形です。この文𠄎𠄎の𠄎𠄎角の屋根の形を、「ひとやね」と呼びます。𠄎が大きく脚を𠄎𠄎いて構えている形です。その下に𠄎𠄎𠄎の𠄎𠄎の形を置いて、中に割って入る、中を取り持つという𠄎𠄎𠄎𠄎を表します。また、そこから“たすける”という𠄎𠄎𠄎𠄎が生じて、平𠄎𠄎時代の官職の“すけ”にこの𠄎𠄎が当てられることがあります。またそこから現𠄎𠄎でも、男𠄎の名前に“すけ”として用いられています。漢点𠄎𠄎では、「𠄎」で「ひとやね」を表し、「𠄎」で「儿」を表しています。𠄎𠄎の形を「ひとあし」ととらえて、「𠄎」を採用しました。

「𠄎𠄎𠄎𠄎」 「𠄎𠄎入」 「𠄎𠄎護」 「𠄎𠄎助」  
 「紹𠄎𠄎」 「仲𠄎𠄎」 「芥川龍之𠄎𠄎」

(49) 先𠄎𠄎 セン さき さき-んずる ま-ず

「土𠄎」の左上にカタカナの「ノ」を付けて、下に「儿」を付けた形の文𠄎𠄎です。“先代、先𠄎、先𠄎”と、時𠄎𠄎的に遡った𠄎𠄎𠄎𠄎を表します。また、他の𠄎より𠄎𠄎くとか、他はさておいてとかの𠄎𠄎𠄎𠄎も表します。さらに、長いもの、動くものの前の部𠄎をも指します。しかし現𠄎𠄎では、時𠄎𠄎的に遡った、過去を指すばかりでなく、𠄎𠄎𠄎𠄎を𠄎うこともありますので、注𠄎𠄎が𠄎𠄎要です。漢点𠄎𠄎では、「𠄎(土)」と「𠄎(儿)」で表されますが、“儿”に「𠄎」を採用したのは、他の漢点𠄎𠄎符号と重なるからです。

「𠄎𠄎𠄎𠄎」 「𠄎𠄎代」 「𠄎𠄎祖」 「𠄎𠄎𠄎𠄎」  
 「𠄎𠄎𠄎𠄎」 「𠄎𠄎端」 「刃の切っ𠄎𠄎」  
 「船の舳𠄎𠄎」 「𠄎𠄎ずはお茶を𠄎𠄎杯」

※ 「兄𠄎𠄎」が部𠄎𠄎として含まれる文𠄎𠄎𠄎𠄎つ。

(50) 祝𠄎𠄎 シュク シュウ いわい いわ-う ほ-ぐ

「示𠄎偏」に右側に旁として「兄𠄎𠄎」を置いた形の文𠄎𠄎です。「示𠄎偏」は、祭壇を表します。「兄𠄎𠄎」は、その前にひざまず

いた<sub>レ</sub>を象っています。神様に仕える<sub>レ</sub>、祝い事、神様を讃えることを表します。漢点<sub>二</sub>では、「<sub>レ</sub> (示偏)」と「<sub>レ</sub> (兄)」で表されます。

「<sub>レ</sub>」 「<sub>レ</sub>祭」 「<sub>レ</sub>辞」 「<sub>レ</sub>宴」  
「新年を<sub>レ</sub>ぐ」 「この<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>つのお<sub>レ</sub>いに」

\* 「兄<sub>レ</sub>」の上に<sub>レ</sub>を置いた文<sub>レ</sub>があります。この文<sub>レ</sub>は、部<sub>レ</sub>として多くの文<sub>レ</sub>に含まれます。

**考** 兌<sub>レ</sub> ダ あな ぬけ - での

<sub>レ</sub>位制経済のころ、<sub>レ</sub>された紙幣は、その高に応じた<sub>レ</sub>と交換されていました。このような紙幣を「兌<sub>レ</sub>換紙幣」と呼びます。現代の紙幣は、<sub>レ</sub>とは交換されません。これを「不換紙幣」と呼びます。この「兌<sub>レ</sub>」は、着ている着物を解き放すという<sub>レ</sub>を有します。部<sub>レ</sub>となって「エイ、エツ、セイ、セツ、ダ、ダイ、ダツ」という音と、「かえる、ぬく」という<sub>レ</sub>を表します。

※ 「兄<sub>レ</sub>」の上に<sub>レ</sub>が付く「兌<sub>レ</sub>」が部<sub>レ</sub>として含まれる文<sub>レ</sub>つ。

(51) 説<sub>レ</sub> セツ セイ  
と - く よろこ - ぶ よろこ - ばしい

「言<sub>レ</sub>偏」の右側に「兌<sub>レ</sub>」を置いた形の文<sub>レ</sub>です。<sub>レ</sub>で解き放つという<sub>レ</sub>を表して、ものごとを説明することや、<sub>レ</sub>上の理論を指したりします。また、「よろこぶ、よろこばしい」という<sub>レ</sub>にも用いられることがあります。漢点<sub>二</sub>では、「<sub>レ</sub> (言偏)」と「<sub>レ</sub> (兌)」で表されます。

「<sub>レ</sub>明」 「<sub>レ</sub>得」 「解<sub>レ</sub>」 「小<sub>レ</sub>」  
「<sub>レ</sub>」 「論<sub>レ</sub>」

(52) 税 𠂔𠂔 ㇰ ゼイ みつぎ と-る ぬ-く

「禾<sup>のぎ</sup>𠂔偏」の右側に「兌<sup>たい</sup>𠂔𠂔」を置いた形の文<sup>ぶん</sup>𠂔𠂔𠂔です。「禾偏」は、作物の実りを表した部<sup>ぶ</sup>𠂔𠂔𠂔です。ここでは、𠂔𠂔𠂔𠂔や支配者が、収穫物から決まった<sup>りょう</sup>量<sup>りょう</sup>を抜き取ることを表しています。

“みつぎ”には、この税の他に、“租・庸・調”のあったことが知られます。漢点<sup>かんてん</sup>𠂔𠂔𠂔では、「𠂔<sup>し</sup> (禾偏)」と「𠂔<sup>たい</sup> (兌)」で表されます。

「𠂔𠂔𠂔𠂔」 「𠂔𠂔𠂔額」 「𠂔𠂔𠂔𠂔𠂔」 「地<sup>ち</sup>𠂔𠂔𠂔𠂔」  
「𠂔𠂔𠂔接<sup>けつ</sup>𠂔𠂔」 「消費<sup>しょうぎ</sup>𠂔𠂔」

※ 「見<sup>けん</sup>𠂔𠂔」を部<sup>ぶ</sup>𠂔𠂔𠂔として含む文<sup>ぶん</sup>𠂔𠂔𠂔𠂔𠂔つ。

(53) 覚<sup>かく</sup>𠂔𠂔𠂔 カク  
さ-める さ-ます おぼ-える さと-る

「学<sup>がく</sup>𠂔」の冠と同じ「ツメ冠」の下に、「見<sup>けん</sup>𠂔𠂔」を置いた形の文<sup>ぶん</sup>𠂔𠂔𠂔です。この冠は、𠂔𠂔でやり取りしながら𠂔𠂔どもにもものを教えるという<sup>し</sup>𠂔𠂔𠂔𠂔𠂔があります。この文<sup>ぶん</sup>𠂔𠂔𠂔は、𠂔𠂔が覚める、ものを記憶する、ものごとを感じ取る、𠂔𠂔𠂔き𠂔𠂔けるという<sup>し</sup>𠂔𠂔𠂔𠂔𠂔を表します。漢点<sup>かんてん</sup>𠂔𠂔𠂔では、「𠂔<sup>けん</sup> (ツメ冠)」と「𠂔<sup>けん</sup> (見)」で表されます。

「𠂔𠂔𠂔醒<sup>せい</sup>」 「𠂔𠂔𠂔悟<sup>ご</sup>」 「感<sup>かん</sup>𠂔𠂔𠂔」 「知<sup>ち</sup>𠂔𠂔𠂔」  
「𠂔𠂔𠂔え書き」 「𠂔𠂔𠂔束<sup>たすく</sup>無い」

(54) 視<sup>し</sup>𠂔𠂔𠂔 シ み-る

「示<sup>し</sup>𠂔偏」の右側に「見<sup>けん</sup>𠂔𠂔」を置いた形の文<sup>ぶん</sup>𠂔𠂔𠂔です。「示<sup>し</sup>𠂔」の祭壇の<sup>し</sup>𠂔𠂔𠂔𠂔は強くありませんが、じっとみる、𠂔𠂔𠂔つ𠂔𠂔𠂔ぐにみるという<sup>し</sup>𠂔𠂔𠂔𠂔𠂔があります。また、「…視」として、ものの<sup>し</sup>𠂔𠂔𠂔𠂔を表すときにも用いられます。漢点<sup>かんてん</sup>𠂔𠂔𠂔では、「𠂔<sup>し</sup> (示偏)」に「𠂔<sup>けん</sup> (見)」で表されます。

「𠂔𠂔𠂔𠂔𠂔」 「𠂔𠂔𠂔𠂔」 「𠂔𠂔𠂔線」 「𠂔𠂔𠂔点」

「野」 「白眼」 「客観」

※ 「介」を部とした文つ。

(55) 界 カイ さかい

「介」の上に「田」を置いた形の文です。「介」は、ものの「」に入って区切りを付けるという「」があります。この文「」は、「田」は「畑」のことで、耕作地に境を付けて、区画を決める、決められた区画を「」します。現「」では大幅にその「」が広がりました。漢点「」では、「(田)」に「(介)」で表されます。

「限」 「」 「」 「法曹」

\* \* \* \* \*

♪♪♪ 愛唱歌 ♪♪♪

もずが「」れ「」で

作詞 サトー ハチロー

作「」 徳富 繁

もずが「」れ「」でないている  
おいらはわらをたたいてる  
わたびき「」はおばあさん  
コットン「」も「」ってる

みんな去年と同じだよ  
けれども足ん無えものがある  
「」さの薪わる音が無え

「」さは満州へ「」ただよ  
鉄砲が涙に光っただ  
もずよ寒くもなくでねえ  
「」さはもっと寒いだぞ

## 読みの練習 (8)

- (1) これは内ニにお願いします。
- (2) 前代ニの話ですよね。
- (3) うわさにニく建物がこれだったのか。
- (4) 名高い評判は、ちまたにニこえていた。
- (5) 民ニで伝承されてきた話。
- (6) ニでもつばらの噂です。
- (7) 東京と横浜のニの距離を測る。
- (8) このニのニはニ室です。
- (9) 自ニ自答して反省する。
- (10) 社長の責任をニう。
- (11) 鋭くニいをニする。
- (12) 呉服ニ屋に奉公する。
- (13) 花々が満ニの公園です。
- (14) ニをニいてニを受け入れた。
- (15) ニ長のポストがニつニく。
- (16) 窓をニけてください。
- (17) 広いニ地がニけた。
- (18) あのニにはニします。
- (19) 窓をニめましょう。
- (20) びんの栓がニまっている。
- (21) 母はもうニをニじるとニう。
- (22) ニをニざしてしまったニども。
- (23) 今ニは成功しました。
- (24) ニ向をきちんとする。

- (25) コマがくるくるまわります。
- (26) 以前の電話はダイヤルを回した。
- (27) 車をぐるっと回らす。
- (28) 交友を正常化する。
- (29) お酒は柄はずいぶん違うものです。
- (30) 日本に独特な文化。
- (31) 早く車を回さず。
- (32) 油がこぼれまわった。
- (33) 車を踏み止める。
- (34) 車を少しずつ回しましょう。
- (35) 強い車を持った。
- (36) 長所とは一番上の事のことです。
- (37) 太郎は長男の弟でした。
- (38) 長男を尊敬する。
- (39) 車を回してそれと分かる。
- (40) 第一車を回す者を疑う。
- (41) 車を回ると早くとは大違い。
- (42) 親にも写真を回せる。
- (43) 猫は夜でも目が覚める。
- (44) 天に目を覚める。
- (45) 魚の種類はなんでもなんです。
- (46) 車の明がある車でしたよ。
- (47) 車の明の明は細りでしょうか。
- (48) 車を回すを、回さずという。
- (49) 回さずは、お酒が要です。

- (50) 民の何がある？
- (51) をあげる。
- (52) い箸を揃える。
- (53) をう習慣。
- (54) お教はもういやだ。
- (55) 遊に。
- (56) とは何かについて。
- (57) の関は高いのだろうか。
- (58) のは鋭いですぞ。
- (59) 雨の音にがめました。
- (60) かねて腕にえがあるとっていた。
- (61) 無されるのはつらいことです。
- (62) 下に降りた仙。

## 書き取り問題 (8)

- (1) がいぶんのわるいことはいうな。
- (2) ちょうもんかいがひらかれた。
- (3) ラジオのニュースをきく。
- (4) きれいなうたごえがきこえる。
- (5) かんしよくをとると、ふとるよ。
- (6) みけんに、しわをよせる。
- (7) みっかのあいだ、こうねつがつづいた。
- (8) おにのいぬまのせんたくだ。
- (9) こんにやくもんどう、というらくごがありますよ。

- (10) あんぴをとう、はがきをだした。
- (11) ねんれいをとわず、しゅつがんできます。
- (12) そうはとんやがおろさない。
- (13) いまでも、かいこうきねんびをおぼえています。
- (14) くちをひらけばごとばかりで…。
- (15) やっと、まくがあくぞ。
- (16) ふたをあけて、なかみをすてる。
- (17) みなみがわがひらけたいえです。
- (18) へいもんじかんをおしえてください。
- (19) みせをしめたシャッターどおりはさびしい。
- (20) とがしまっている。
- (21) めをとじると、ありありとおもいだす。
- (22) こおりにとざされた、かんそくせん。
- (23) ここからはなしは、じかいにまわします。
- (24) ちょうけいは、わたしよりひとまわりうえです。
- (25) りきしがしめているのは、まわしです。
- (26) つきひはめぐり、ついにやくそくのひがきました。
- (27) にわにかきねをめぐらす。
- (28) こくぶんがくというよびなが、もんだいになりました。
- (29) おおいしらのすけは、くになろうでした。
- (30) しっかり、こていすることがだいじです。
- (31) いしは、どんなきよりもかたいでしょうか。
- (32) に、さんにんで、かたまっかえる。
- (33) こむぎこをこねてかためるのです。
- (34) べっこにかいけんをする。
- (35) かくこじんでせきにんをもとう。

- (36) けいていしまいと、かけますか。
- (37) おいらのきょうだいぶんはいっぱいだ。
- (38) あにを、にいさんという。
- (39) ひとをがいけんではんだんしないこと。
- (40) このことについて、しょけんをのべます。
- (41) みるからにつよそうだ。
- (42) てほんをかいてみせる。
- (43) くものかたちが、ひつじにみえる。
- (44) てきにまみえる。
- (45) むしがばいかいするでんせんびょうはおおい。
- (46) せんげつ、わたしはひっこしました。
- (47) まけるまいとさきをあらそう。
- (48) さきんずればひとをせいす。
- (49) これで、まずはだいじょうぶ。
- (50) しゅくはいをあげる。
- (51) ごしゅうぎをわたす。
- (52) いわいざけをのむ。
- (53) かどでをいわう。
- (54) わたしは、せつわをあつめています。
- (55) むかしからのみちをとく。
- (56) ぜいむしょにはいきたくないなあ。
- (57) まずい、はっかくしそうだぞ。
- (58) みかどのおぼえめでたいにようご。
- (59) たいへいのねむりをさますじょうきせん。
- (60) ぶんすいかいで、かわがわかる。

\* \* \* \* \*

### 3 複合文 (1)

#### 4. 漢字および第基文を部とした文 (4)

※ 「学、覚」の冠「ツメ冠」の文つ。

(56) 榮 エイ ヨウ は-える さか-える さか-ん

「学、覚」と同じ冠「ツメ冠」の下に「木」が置かれる文です。この「ツメ冠」は、「学」や「覚」とは異なって、杯に花が咲いている様を表しています。はなやかでにぎやかな様、さかえにぎわっているというがあります。また、身の栄養、漢でうところのエネルギーや、の屋根の端、軒のもあります。漢点では、「(ツメ冠)」と「(木)」で表されます。

「養」 「冠」 「繁」 「春」

「耀華」 「盛衰」 「花物」

(57) 勞 ロウ  
つか-らす つか-れる いたわ-る ねぎら-う

「ツメ冠」の下に「力」を置いた形の文です。この「ツメ冠」は、が盛んに燃えている様を表しています。そこから、を出し尽くして働く、を使い果たして疲れるというが生じました。またそれをいたわる、ねぎらうというも表します。漢点では、「(ツメ冠)」と「(力)」で表されます。

「働」 「」 「」 「作」

「」 「勤」 「疲」

「せずして…」 「を厭わず」

※ 「加」とそれを含む文。

(58) 加 カ ケ くわ-える くわ-わる くわ-うるに

「力」の右側に「口」を置いた形の文です。ものを「くわえる」、を増す、影響を与えるの、を表します。さらに、「くわうるに」と、副詞的にも用います。漢点では、「(力)」と「(口)」で表されます。

「減」 「盟」 「入」 「圧」  
「害者」 「」

(59) 賀 ガ カ よろこ-ぶ

「加」の下に「貝」を置いた形の文です。「加」は、肩にものを担ぐことを、「貝」は、高価な金品を表して、祝いの品を担いで持ってくことをします。漢点では、「(加)」と「(貝)」で表されます。

「状」 「詞交換」 「年」 「」  
「慶」 「謹新年」

※ 「化」とそれを含む文。

(60) 化 カ ケ ゲ ば-ける ば-かす か-わる

この文は、左右つの部からなっています。左側は「人偏」、右側は「比」の右側、すなわち、カタカナの「ヒ」に似た形をしています。何れもの姿を表しているとわれます。左側は、立っているの、右側は、身を上げての姿とされます。この文は、このようにの姿形の変化を以て、ものごとの移り変わり、変容を表します。漢点では、「(人偏)」と「(比の右側)」で表されます。この場合の偏は、「」ではなく、「」です。このような符号を、「第偏」と呼びます。

「𦰩𦰩𦰩」 「𦰩𦰩合」 「𦰩𦰩𦰩」 「𦰩𦰩粧」  
 「文𦰩𦰩」 「変𦰩𦰩」 「𦰩𦰩𦰩」 「羽𦰩𦰩」  
 「𦰩𦰩変𦰩𦰩」

(61) 花𦰩𦰩 カ ケ ゲ はな

「草𦰩冠」の下に「化𦰩𦰩」を置いた形の文𦰩𦰩です。「化𦰩𦰩」は、様々に姿を変えることを𦰩𦰩𦰩𦰩していますが、この文𦰩𦰩は、植物が大きく姿を変えたもの、様𦰩𦰩が変わり易いもの、すなわち鮮やかな「はな」を表します。また波及して、華やかなもの、派𦰩𦰩なものも指します。𦰩𦰩𦰩𦰩では「はな」と𦰩𦰩えば、「サクラ」を指しますが、中𦰩𦰩𦰩では「ボタン」であったり「モモ」であったりします。漢点𦰩𦰩𦰩では、「𦰩 (草冠)」に「𦰩 (化)」で表されます。

「𦰩𦰩壇」 「𦰩𦰩瓶」 「生𦰩𦰩」 「供𦰩𦰩𦰩」  
 「𦰩𦰩𦰩𦰩」 「𦰩𦰩束」 「𦰩𦰩道」 「𦰩𦰩𦰩𦰩」

(62) 貨𦰩𦰩𦰩 カ まいない - する

「化𦰩𦰩」の下に「貝𦰩」を置いた形の文𦰩𦰩です。𦰩𦰩もとは、何にも変えることのできるもの、すなわち「おかね」のことでした。現𦰩𦰩𦰩ではそれに𦰩𦰩えて、商品や財産も表します。また、「まいないする」と読んで、「賄賂」の𦰩𦰩𦰩𦰩にも用いられます。漢点𦰩𦰩𦰩では、「𦰩 (貝)」と「𦰩 (化)」で表されます。左右が逆になった文𦰩𦰩です。

「𦰩𦰩幣」 「𦰩𦰩物」 「𦰩𦰩𦰩𦰩」 「通𦰩𦰩𦰩」  
 「財𦰩𦰩𦰩」

※ 「言𠄎𠄎」、「云𠄎𠄎𠄎」を部𠄎𠄎として含む文𠄎𠄎𠄎。

・「言𠄎」を含む文字。

(63) 信𠄎𠄎𠄎 シン まこと のぶ

「人𠄎偏」の右に「言𠄎」を置いた形の文𠄎𠄎𠄎です。𠄎𠄎度𠄎に出したことを、決めたことを、𠄎𠄎げずに実𠄎する、𠄎𠄎当のことでとするという𠄎𠄎𠄎𠄎を表します。また、𠄎𠄎当のことを伝える、ものごとを信じるという𠄎𠄎𠄎𠄎もありません。漢点𠄎𠄎𠄎では、「𠄎(人偏)」と「𠄎(言)」で表されます。

「𠄎𠄎用」 「𠄎𠄎頼」 「𠄎𠄎仰」 「𠄎𠄎号」  
 「通𠄎𠄎」 「音𠄎𠄎」 「風𠄎𠄎」 「交𠄎𠄎」  
 「電𠄎𠄎」

(64) 恋𠄎𠄎𠄎 レン  
 こい こーう こいーしい

旧字 「戀」
-----------

この文𠄎𠄎𠄎の旧𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎の上部は、横に「糸𠄎、言𠄎、糸𠄎」と並んでいます。糸がもつれるように、きっぱりとものごとを決めかねる、ものごとが乱れる様𠄎を表しています。この文𠄎𠄎𠄎は、その下に「心𠄎」を置いた形で、𠄎がもつれ乱れることを表しています。男𠄎の𠄎の引き合う𠄎、それによって引き起こされる様々な𠄎𠄎𠄎𠄎模様を含んだ文𠄎𠄎𠄎です。漢点𠄎𠄎𠄎では、「𠄎(言)」と「𠄎(心)」で表されます。𠄎𠄎つの「糸𠄎」が省略されています。

「𠄎𠄎愛」 「𠄎𠄎情」 「𠄎𠄎慕」 「失𠄎𠄎」  
 「𠄎𠄎𠄎」 「忍ぶ𠄎𠄎」



\* 以下の𠄎𠄎つ文𠄎𠄎は、墨𠄎𠄎では「云𠄎𠄎」を部𠄎𠄎として含んでいますが、これは𠄎𠄎𠄎に含まれている「專」の略𠄎𠄎です。そこで漢点𠄎𠄎では点𠄎𠄎の符号に、「𠄎」ではなく、「𠄎」を採用しました。

(68) 伝𠄎𠄎      デン   テン  
                  つた - える   つた - わる  
                  つた - う   つたえ   つて

旧字  
「傳」

墨𠄎𠄎では、「人𠄎偏」の右側に「云𠄎𠄎」を置いた形の文𠄎𠄎です。この「云𠄎𠄎」は、「專」の略𠄎𠄎で、「專」は、「𠄎𠄎いもの」を表しています。𠄎𠄎いものをころころと転がして、𠄎から𠄎へ手渡す様𠄎𠄎を表している文𠄎𠄎です。そこから、𠄎から𠄎へ、ものや情報が伝わる、昔から今へ、話しや習慣が伝わっているという𠄎𠄎𠄎に用いられます。漢点𠄎𠄎では、「𠄎 (人偏)」と「𠄎 (云)」で表されます。右側の点𠄎𠄎の符号に、「云𠄎𠄎」の「𠄎」でなく、「𠄎」が用いられるのは、𠄎𠄎𠄎に従っているからです。

「𠄎𠄎𠄎」      「𠄎𠄎達」      「𠄎𠄎𠄎𠄎」      「𠄎𠄎記」  
 「𠄎𠄎統」      「列𠄎𠄎」      「駅𠄎𠄎」      「以𠄎𠄎𠄎𠄎」  
 「𠄎𠄎𠄎い」      「道𠄎𠄎い」      「𠄎𠄎𠄎」

(69) 転𠄎𠄎      テン  
                  ころ - ぶ   ころ - がる   ころ - げる  
                  ころ - がす   まろ - ぶ   うた - た

旧字  
「轉」

墨𠄎𠄎では、「車𠄎偏」の右側に「云𠄎𠄎」を置いた形の文𠄎𠄎です。この「云𠄎𠄎」は、「專」の略𠄎𠄎で、「專」は、「𠄎𠄎いもの」を表しています。「車𠄎」とともに、𠄎𠄎いものがころころと転がる、転げる、転がすという𠄎𠄎𠄎を表します。時代が移る、𠄎が変わる、ぐるっと𠄎𠄎𠄎りするという𠄎𠄎𠄎が含まれていて、「うたた」と読んで、移り易い様、𠄎速する様、ものごとが悪い𠄎へ𠄎む様を表します。漢点𠄎𠄎では、「𠄎 (車偏)」と「𠄎 (云)」で表されます。右側の点𠄎𠄎の符号に、「云𠄎𠄎」の「𠄎」でなく、「𠄎」が用いられるのは、𠄎𠄎𠄎に従っているからです。

「𤇑𤇑居」 「𤇑𤇑勤」 「𤇑𤇑校」 「𤇑𤇑移」  
 「𤇑𤇑𤇑𤇑」 「気が動𤇑𤇑する」  
 「𤇑𤇑𤇑𤇑び𤇑𤇑起き」 「𤇑𤇑た寝」 「𤇑𤇑た𤇑」

※ 「火𤇑」を部𤇑𤇑として含む文𤇑𤇑。

(70) 秋𤇑𤇑 シュウ あき とき

「ノ木𤇑偏」の右側に「火𤇑」を置いた文𤇑𤇑です。  
 𤇑𤇑𤇑𤇑では旁に「龜」が入っていて、𤇑で龜をあ  
 ぶることを表していますが、通常は省略されます。

参考  
「穉」

「ノ木偏」は、作物の豊かな実りを表すもので、この文𤇑𤇑は、  
 収穫の季節の秋を表しています。また、「とき」と読んで、大切  
 なその時の𤇑𤇑𤇑𤇑にも用います。漢点𤇑𤇑では、「𤇑(ノ木偏)」  
 と「𤇑(火)」で表されます。

「𤇑𤇑𤇑」 「𤇑𤇑天」 「𤇑𤇑光」 「春夏𤇑𤇑冬」  
 「白𤇑𤇑」 「𤇑𤇑の長雨」

(71) 畑𤇑𤇑 はた はたけ

「火𤇑偏」の右側に「田𤇑」を置いた形の文𤇑𤇑です。「田𤇑」は、  
 耕地全般を表す文𤇑𤇑で、ここでは𤇑を張らない耕地、すなわち  
 “はたけ”を表しています。“はたけ”は、𤇑地に生えている𤇑  
 を𤇑で焼いて、害虫駆除と灰を肥料にする焼き畑から始まりまし  
 たが、この文𤇑𤇑はそこから生まれた 𤇑𤇑𤇑𤇑です。また現  
 𤇑𤇑では、波及して、𤇑𤇑𤇑や技術の専𤇑𤇑野を“はたけ”と呼  
 んでいます。漢点𤇑𤇑では、「𤇑(火)」と「𤇑(田)」で表されま  
 す。

「𤇑𤇑作」 「𤇑𤇑地」 「𤇑𤇑𤇑」 「技術𤇑𤇑」  
 「営業𤇑𤇑」

(72) 炎 ㇿㇿㇿ エン ほのお ほむら

「火 ㇿ」を縦に ㇿㇿㇿつ並べた形の文 ㇿㇿㇿです。ㇿㇿㇿが盛んに燃えている様 ㇿを表しています。また熱を ㇿ散することから、熱 ㇿの ㇿ気も ㇿㇿㇿㇿㇿします。漢点 ㇿㇿㇿでは、「ㇿ」を ㇿㇿㇿつ並べて表されます。

「ㇿㇿㇿ熱」 「ㇿㇿㇿ症」 「ㇿㇿㇿ暑」 「ㇿㇿㇿ天」  
「アレルギー ㇿ鼻 ㇿㇿㇿ」

・「炎 ㇿㇿㇿ」を含む文 ㇿㇿㇿ。この部 ㇿㇿㇿの音は、「だん、たん」。

(73) 談 ㇿㇿㇿ ダン タン かた-る

「言 ㇿ偏」の右側に「炎 ㇿㇿㇿ」を置いた形の文 ㇿㇿㇿです。ㇿㇿㇿが燃え上がるように、盛んに話をする様 ㇿを表した文 ㇿㇿㇿです。また、ㇿの前に立ってする話、ㇿから ㇿㇿㇿき取った話、ㇿㇿㇿ対してする話等、話全般に用いられる文 ㇿㇿㇿです。漢点 ㇿㇿㇿでは、「ㇿ (言偏)」と「ㇿ (炎)」で表されます。

「ㇿㇿㇿ話」 「ㇿㇿㇿ合」 「ㇿㇿㇿ笑」 「ㇿㇿㇿㇿㇿㇿ」  
「ㇿㇿㇿㇿㇿㇿ」 「講 ㇿㇿㇿ」 「商 ㇿㇿㇿ」

※ 部 ㇿㇿㇿの「列 ㇿ」を含む文 ㇿㇿㇿ。「列 ㇿ」は、文 ㇿㇿㇿの下の部 ㇿに ㇿㇿㇿつの点が並んだものです。この部分は、ㇿの燃える様を象ったもので、漢点 ㇿㇿㇿでは「ㇿ」で表されます。

(74) 点 ㇿㇿㇿ テン とも-す とも-る つけ-る た-てる

「卜 ㇿㇿㇿ」の下に「口 ㇿ」の形の文 ㇿㇿㇿ「占 ㇿㇿㇿ」、その下に ㇿㇿㇿつ点の列 ㇿ「ㇿ」を置いた形の文 ㇿㇿㇿです。小さなテンを ㇿㇿㇿㇿㇿします。点 ㇿの形で、評価の表現として用いられます。また、ㇿㇿㇿつだけぽつんと離れている様 ㇿ、ものや ㇿが散らばっている様 ㇿを表します。さらに、灯りを「ともす」、ㇿを「つける」、お茶を「たてる」とも用います。漢点 ㇿㇿㇿでは、「ㇿ (占)」と「ㇿ (列 ㇿ)」で表されます。「卜 ㇿㇿㇿ」は省略されます。

\* 「占☰☷」、 “セン、しめる、うらなう” は、中級編でご紹☰☷します。

「☰☷☰☷」 「☰☷灯」 「☰☷☰☷」 「☰☷☰☷」  
「得☰☷☰☷」 「欠☰☷☰☷」 「灯を☰☷☰☷す」  
「☰☷を☰☷☰☷ける」 「野☰☷☰☷てをする」 「お茶のお☰☷☰☷前」

(75) 然☰☷☰☷ ゼン ネン しか-り しか-るに しか-し

この文☰☷☰☷は、上の部☰☷の右側に「犬☰☷」、左側に「肉☰☷」を置いて、その下に列☰☷「☰☷」を置いた形です。☰☷は神聖な動物とされて、その☰☷を☰☷であぶって吉凶を占いました。“しかり”と肯定したり、“しかし”と否定するのに用いられます。また、総☰☷☰☷的な状態や姿・態度を表す☰☷としても用いられます。漢☰☷☰☷☰☷では、「☰☷ (犬)」と「☰☷ (列☰☷)」で表されます。「肉☰☷」は省略されます。

「当☰☷☰☷」 「偶☰☷☰☷」 「断☰☷☰☷」 「陶☰☷☰☷」  
「天☰☷☰☷自☰☷☰☷」 「全☰☷☰☷…ない」

・「然☰☷☰☷」を含む文☰☷☰☷。

(76) 燃☰☷☰☷☰☷ ネン も-える も-やす

「火☰☷偏」の右側に「然☰☷☰☷」を置いた形の文☰☷☰☷です。「然☰☷☰☷」には、☰☷で焼くという☰☷☰☷☰☷があって、そこにさらに「☰☷偏」を添えて、☰☷☰☷を上げ、高熱を放散しながら燃え上がる様☰☷を表す文☰☷☰☷です。漢☰☷☰☷☰☷では、「☰☷ (☰☷偏)」と「☰☷ (然)」で表されます。

「☰☷☰☷焼」 「☰☷☰☷料」 「可☰☷☰☷物」 「内☰☷☰☷機関」  
「☰☷☰☷えるゴミ」 「☰☷☰☷えないゴミ」

\* \* \* \* \*

♪♪♪♪ 愛唱歌 ♪♪♪♪

☺☺週☺☺

楽団カチューシャ 訳詞  
ロシア民謡

☺☺曜☺☺に ☺☺場へ出かけ  
☺☺と麻を 買って来た  
      テュリヤテュリヤ  
      テュリヤテュリヤリヤ  
      テュリヤテュリヤ  
      テュリヤテュリヤリヤ

☺☺曜☺☺に おふろをたいて  
☺☺曜☺☺は おふろに入り  
      (くり返し)

☺☺曜☺☺に あなたと☺☺☺って  
☺☺曜☺☺は 送っていった  
      (くり返し)

☺☺曜☺☺は ☺☺巻きもせず  
☺☺曜☺☺は おしゃべりばかり  
      (くり返し)

☺☺☺よ これが☺☺の  
☺☺週☺☺の仕事です  
      (くり返し)

## 読みの練習 (9)

- (1) ごおめでとうございます。
- (2) 時代にえた。
- (3) えある勝利に拍。
- (4) わざわざご足いただきまして…。
- (5) 弟のをう。
- (6) 付価値の高い物が売れる。
- (7) 仲にえる。
- (8) のは「州」といました。
- (9) 風作用で岩がになる。
- (10) おけと幽霊はどこがちがう？
- (11) 狐がをかす話。
- (12) 虫たちが粉を集める。
- (13) びらを弁といいます。
- (14) は粧をして若返るの。
- (15) 村には、小さな雑屋さんがあった。
- (16) 彼は、自過剰ですね。
- (17) 確を持ってえますよ。
- (18) 今の長野県は州とわれました。

- (19) 演歌に多い悲<sub>レ</sub>と失<sub>レ</sub>。
- (20) <sub>レ</sub>い焦がれた<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>う。
- (21) あの<sub>レ</sub>が<sub>レ</sub>しい。
- (22) お前にこんな<sub>レ</sub>当はできないだろう？
- (23) 大道<sub>レ</sub>が流<sub>レ</sub>ってきましたね。
- (24) 再<sub>レ</sub>を約束する。
- (25) <sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>が始まった。
- (26) <sub>レ</sub>釈をして通り過ぎる。
- (27) 旧友に偶<sub>レ</sub>う。
- (28) <sub>レ</sub>画とは<sub>レ</sub>のことです。
- (29) <sub>レ</sub>を読み<sub>レ</sub>させることが大切です。
- (30) <sub>レ</sub>ゲームはおもしろい。
- (31) 宣<sub>レ</sub>で勝負が決まる。
- (32) <sub>レ</sub>から<sub>レ</sub>へと<sub>レ</sub>わる噂。
- (33) <sub>レ</sub>や孫に<sub>レ</sub>える<sub>レ</sub>。
- (34) これは<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>いた話で…。
- (35) 地球は自<sub>レ</sub>しつつ公<sub>レ</sub>している。
- (36) <sub>レ</sub>んでもただは起きませんよ。
- (37) <sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>俵に<sub>レ</sub>がした。

- (38) 窓の扉に鍵がかり込んだ。
- (39) 静かな朝の静けさの思いで待つ。
- (40) 曇り晴れの良い天気です。
- (41) これは全然違うの仕事ですわ。
- (42) 浄土寺の境内上。
- (43) 憤怒の心を静かす。
- (44) 冗談でしょう、その話…。
- (45) 余計ですが、ちょっとお話ししましょう。
- (46) 平均値を出す。
- (47) 境界線を引く。
- (48) 静かな野原をいただきます。
- (49) それは公然たる秘密であった。
- (50) 天竺記念物を傷つけないこと。
- (51) 静かすべき処置をよろしく。
- (52) 貧しくて静けさも静け身でした。
- (53) 静かな油を静かな料にする。
- (54) 静かなえるような静かなっ赤なバラ。
- (55) どんどん焼きで静けを静かす。

\* \* \* \* \*

## 書き取り問題 (9)

- (1) おほめにあずかり、こうえいです。
- (2) ここも、むかしはさかえていたとおりでしたが…。
- (3) はえあるゆうしょうに、わきたつ。
- (4) げんざい、かろうしはひじょうにおおい。
- (5) ぶかを、いろうかいでねぎらう。
- (6) しまった、ついきりようきんとられたよ。
- (7) あいてにだけきをくわえる。
- (8) こんど、しゅくがかいをひらこう。
- (9) どうぶつしょくぶつともに、しんかする。
- (10) おばけのはなしはこわくてもすき。
- (11) たぬきが、こぞうにばける。
- (12) らっかせいとは、ピーナッツのことです。
- (13) はなのようにうつくしいむすめでした。
- (14) それはちょうちよの、けしんでした。
- (15) きんかとぎんかがざっくざく。
- (16) いまでもめいしんをしんじるひとはたくさんいます。
- (17) しんらいされてこそできるしごと。
- (18) しんえつちほうをたびする。
- (19) よこれんぼをしておきるひげき。
- (20) こいわずらい…、おまえがかい？
- (21) このとしになると、こきょうがこいしい。
- (22) しゅげいがわたしのしゅみです。
- (23) がくげいだいがくはどこにあるの？
- (24) あのひとは、しかいがとてもじょうずです。
- (25) かいへいかいをつけるのが、ぎちょうでしょう。
- (26) さすがわがでし…、すっかりえとくしたのう。
- (27) らいげつまた、ぜひおあいしましょう。
- (28) しょうがくせいのかいがをあつめた。

- (29) ことしはひつじのえまがおおいそうです。
- (30) すいがいのあとは、でんせんびょうがこわい。
- (31) じじよでんをあらわす。
- (32) よろしくおつたえください。
- (33) むかしからつたわるしゅほうでつくる。
- (34) つてをもとめてあるく。
- (35) ここにてんとうぼうしのさくがある。
- (36) たまをころがすようなこえ。
- (37) おい、かねがころがりこんできたぞ。
- (38) おおきないしがころがっている。
- (39) しょしゅうのここちよいかぜ。
- (40) あきのななくさをいえますか？
- (41) はたけすいれんとは、やくだたないれんしゅうです。
- (42) からだのどのぶぶんでも、えんしょうをおこします。
- (43) ろうそくの、ほのおをけす。
- (44) ぎつだんにはなをさかす。
- (45) すぐそうだんをしよう。
- (46) あいてのじゃくてんをさがして、かった。
- (47) てんけんをおねがいしますよ。
- (48) けっこうなおてまえでした。
- (49) じこをみぜんにふせいだいぬ。
- (50) てんねんとうがもういをふるったとし。
- (51) せそうのしからしめるところですよ。
- (52) ちゅういをされ、しかもあらためないとは…。
- (53) これは、ふねんせいのぬのでできています。
- (54) たばこのもえさしからかじがおきる。
- (55) ふるいごみをもやす。

\* \* \* \* \*



【附】 これまでに出てきた漢点字一覧

第一回

漢数字とその《近似文字》

- 1 一 二 三 四 五 六  
 7 七 八 九 十 廿 百  
 13 千 14 万 15 億 16 兆 \* ○  
 《亜 参 丸 意 元》

第一基本文字とその《近似文字》

- 1 目 2 糸 3 系 4 比 5 数 6 家 7 宿 8 学  
 9 言 10 語 11 頁 12 貝 13 金 14 木 15 草  
 16 犬 17 子 18 都 19 市 20 発 21 食 22 馬  
 23 田 24 竹 25 土 26 手 27 戸 28 人 29 仁  
 30 水 31 氷 32 力 33 示 34 私 35 走 36 進  
 37 火 38 女 39 玉 40 方 41 石 42 耳 43 車  
 44 門 45 病 46 行 47 店 48 月 49 肉 50 分  
 51 日 52 性 53 心 54 口 55 囿 56 十 57 止  
 《真 面 云 首 具  
 未 末 本 由 曲  
 永 必 才 正》

第二回

複合文字

漢数字および第一基本文字を部首とした文字

- 1 林 2 森 3 材 4 相 5 想 6 果  
 7 課 8 休 9 保 10 来 11 味 12 体  
 13 字 14 宗 15 宝 16 安 17 案 18 穴  
 19 究 20 完 21 院 22 軍 23 計 24 早  
 25 協 26 直 27 朝 28 世 29 葉 30 古  
 31 苦 32 枯 33 湖 34 有 35 存 36 在  
 37 聞 38 間 39 問 40 開 41 閉 42 回  
 43 国 44 固 45 個 46 兄 47 見 48 介  
 49 先 50 祝 \* 兌 51 説 52 税 53 覚  
 54 視 55 界 56 榮 57 勞 58 加 59 賀  
 60 化 61 花 62 貨 63 信 64 恋 65 芸  
 66 会 67 絵 68 伝 69 転 70 秋 71 畑  
 72 炎 73 談 74 点 75 然 76 燃